社会体制と家族の変化

林　雅孝

目　次

一　体制の変化と家族の変化
二　公式とその歪曲・逸脱――住民主体次元の諸型相
三　体制と家族

一　体制の変化と家族の変化

歴史の段階の発展につれて、人間形成（パースナリティの発展）の基礎的集団である家族も変化して行く。この場合の家族は、制度の末端細胞として、社会の構造的存在である。

ところで、こうした枠組に立つ時、家族の変化をもっとも顕著に惹き起すのは、いうまでもなく体制の変化である。このことを国外において例証すれば、その最大のものは一九一六年のソヴイエト（ロシヤ）の革命（一九三一にはソヴイエト社会主義共和国連邦の誕生）、一九四九年の中国の革命（中華人民共和国の誕生）であろう。著者は、中国家族についてささやかな研究の機会を持ったが[1]、このことは緒についたばかりで、今回はこれを省略する。さて、そこで、国内では、革命という言葉にはニュアンスの差はあるにしても、一八六八年の明治維新、一八四七年の民法改正などが考えられる。

もちろん、体制の変化でもっとも大切なのは、生産（経済）構造の変化である。だから、家族の変化は、生産（経済）構造の変化と密接に相関するということになる。柔軟に換言すれば、家族の変化は社会構造の変化と相即する。

ところで、ここらで家族というタームを整理しておく必要があろう。現在では、家族は「成員の福祉追求の第一次集団（森岡）」といわれる。しかし、これも、時代と社会によってその定義にニュアンスの差を有している。過去にさかのぼれば―我が国のばあい―「家」の概念が家族という範域をおおいつくすであろう。また、現時点に感覚を合わせれば、家庭や世帯さらに個人の概念が家族の範域を横断して強く自己主張をしてクローズアップされる。そして、このような混線的事態こそが社会の一般的現実で、家族はこうした諸概念の最大公約数とも考えられる。小論では、此の事をはじめに銘記しておかなければならない。

次には、地域なるタームも整序しておく必要があろう。この地域なるタームの概念は仲々簡単に論じ去ることも困難の如くであるが、戦前あるいは、藩政期におけるものも当然範域に入れ得よう。そして、現在では、当然それは、地方自治が強調され、地域社会―コミュニティづくりが強調されている状況下のものである。この地域は、体制と家族―家の中間

次元の枠組として存在する。そして、家族型相の地域的独自性を現出せしめて止まないとみることも出来よう。体制の中央集権度や斉一度が変化を持てば持つ程、家族型相の地域的独自性もバラエティに富んでくる。我々は、第二番目に、このことを銘記すべきであろう。いうまでもないことであるが、地域とは中央に対する地方ではない。それは、主体的な住民の生き生きと生活する生活現場たる地域社会のことである。だから、この伝でいけば、東京もまた一つの地域社会である。

こうなってくると、社会体制と家族の変化というテーマを持つ小論も、単純な直線型では論じられ得ない。つまり「体制―地域―家―家族―家庭―世帯―個人」の各次元が、それぞれに多様に現われ得ることを許容しながら一つの体系に整序して家族を中心に論議する、というのが小論の手法となる。

二　公式からの歪曲・逸脱――住民主体次元の諸型相

1945年八月十五日、日本社会は新しい段階に入った。いうまでもなく、民主々義社会の段階である。この民主々義は、日本独自でもやがては自生すべきものではあった。だから、1945年は他から数十年を早めて与えられた、という形をとったことはいえる。しかし、ともあれ、いまや民主々義段階を疑うことはできない。しかし、一片の法改正や、一個の大事件で社会の隅々まで万般を変革することは至難である。いま、戦後三五年を経過したが、「日本に民主々義が土着するまでには百年はかかるだろう」といわれている。そこで、小論にかえれば、もちろん、家族の変化も一回の体制（的）変化で直ちに悉皆完了する事は不可能である。ある一つの尺度からいえば、体制に抵抗して自己を顕現せんとするのが人間である、といえなくもない。少なくとも、主体の確立した住民の地域社会生活の現場では、体制（的）変化が個々の生活現場に浸透するには、内容的に幾段階もの経過過程が存在する。また、その問題の前に、定義そのものも仲々統一し難い問題もある。例えば、明治維新にさいしては、武士階級の生活様式、思考様式を全国民の範例にして「教科書」的位置に設定した、といわれる。しかし、いうまでもないことであるが、藩政期から生活と思考は階層（級）的にそれぞれ独立した存在であったことは疑えない。つまり、小論のばあいでいえば家族――と一般に定められた構造と機能の定型は、階層（級）により、地域により、多くの歪曲・逸脱を現出せしむるのが社会の現実である。極端に表現してみれば、体制が決めた定型は、社会には家際には存在しない。この事は「統計のウソ」といわれる真実、つまり、統計が示す数値（例えば平均値）そのものの個体は実さいには存在しない、こととも対応し得ようか。

さて、小論では、著者が自らの調査経験で体験した事例を紹介したい。それは凡そ最近の二〇年間の調査であり、歴史的過程の分析も含む。したがって小論テーマとのかかわりを次のように限定せざるを得ない。

(1)　家族といっても種々の型相があること。いわゆる「家族」などという範域ではとらえ得ないものもあること。

(2)　藩政期から、敗戦前までの期間において体制的志向の主潮流とかなりかけ離れた家族型相が各地で各様に見ら

れること。

(3) 現憲法、現民法（家族法）下において、動に対する反動――それは時代の主流たる大波ではなく、小波、中波程度のものではあるが――として、歴史回帰傾向がかなり強いこと。つまり文化的要因が「ふるさと」回帰、「家」回帰を促進している面があること。

(4) 高度経済成長、高度雇用政策、生活水準向上、思考様式の現代化の大波――その消長とともに――は、途方もない形で地域と家族を変貌せしめている面があること。

(5) 「存在が意識を規定」すると措定すれば、地域社会の社会的・地理的位置と、個々の家族の空間構造が家族型相を大きく規定していること。

以上の五規準類型である。もちろん、小論の構築枠組に関する第一次的要因は体制＝生産（経済）構造であり、右の五規準類型は、その中での第二次的要因である事はいうまでもないことである。

さて、上述のような規準類型に合致する地域と家族の事例は次のようである。

明治以来の日本は、大筋において、旧武士階級の家族型態を骨子とし、儒教倫理を重視し乍ら、教育勅語によって、新日本国の型相を確立せんとした、といえる。こうした状況の中で、異なった文化要因により、地域と家族に特異な型相を示したのは、筑後今村（福岡県三井郡大刀洗町大字今）[2]であった。当時（一九六〇）筑後今村は面積〇・六三方粁、人口四七五人、世帯数八五、農家数七三、農家一戸当耕地六、四九反、二兼比率二六％。カトリック信者数四二九（藩政期に隠れの歴史を持つ）であった。その世帯一覧表は表一に示す如くである。この表で、直ちに判明する如く、移民（南米ブラジルのカトリック圏中心）の盛況を特色とする。信者家族で移民を送っていないもの7戸のみ、当時の世帯主の中、南米よりの帰村者一一名である。こうした現象の意味するものは、「個人」と「家庭」の強調であるといえる。「家」「長子相続」「本分の系譜」「男尊女卑」などの日本的特性は、ここでは、戦前においてすでにかなり弱められていた。要するに、ここでは、家族制度は内部から変容していた、といえる。敗戦がこのことを助長し確立したことはいうまでもない。

このような事は、別途に周防和田村（山口県大島郡東和町旧和田村）[3]でも確かめられた（一九七〇―七一調査）。和田村は当時二八四世帯、八七六人。農漁がかなり多かったが、ハワイ、アメリカへの移民の盛んな土地であった。この地の移民で銘記すべきことは、単身移民、呼寄せ婚、働くばかり⇩貯めるばかり⇩本国（日本）へ送金するばかり⇩故郷へ錦を飾る為の成功――などであろう。明治の気骨と苦斗敢斗の開拓精神は十分に偲ばせるが、現地の土とならず、現地の地場資本に益さない生活様式は〝鼻つまみ者〟とされたという。しかし、これが特殊日本的な、故郷（地域社会）―家―家族の型相ともいえる。したがって、ここのばあい、「家」的なものの中に帰村者を包摂する事が多い。とはいえ、移民前と経済的ステイタスを逆転させている成功帰村者の村内居住は、前述の今村のばあいと同じ様に「家」的地域社会を大きく変貌させる。特に受洗帰村者のばあい、この事は加速されるといえよう。

革命や改革には、最初の動的なものと反動的なものとの二

表1　今(村)部落世帯一覧表(1962)

番号	世帯主氏名	世帯員 一九六〇	世帯数 一九六二	職業(含家族)	専兼別	経営耕地 1950センサス	経営耕地 1950センサス	1960借入耕地	1960貸付耕地	農改による買受耕地	農改時売渡耕地	部落役職	教会役職(聖職者)	村町役職	非信者(真宗)	移民状況
						反	(含宅地)反	反	反	反	反					
1	平田　茂春	9	11	賢次 農	専		10.6 (11.0)			1.1						父の弟一家南米
2	平田　恕市	6	7	農	専	8.7	(8.0) 7.7						恕市宿老			一家南米 次男市長，三男下院議員
3	青木　保隆		6	医		2.6							—		○	—
4	平田ムメノ		5	幸一(息子) 農協							青木藁蔵 1.8					父母メキシコ
5	平田　進	5	3	財務事務所	二兼	2.0	(2.2) 2.0	1.7								
6	青木　紋吾	4	4	二男 職人 三女 事務	二兼	2.9	(2.4) 2.0						紋吾宿老			ブラジル帰り，兄弟南米
7	(平田 千吉)			(不在)			0.2									
8	平田　泰美	3	3	農	専		(2.4) 2.3	2.0								母の弟ブラジル
9	平田タネヨ	1	3	農	専	2.4	(3.5) 3.4				2.0					②の娘ブラジル生
10	井上　テル		3													入村者
11	平田マツノ		4													弟南米
12	青木　繁年	10	11	郵便局	二兼		(1.5) 1.2						繁年 宿老，委員			母の兄弟南米，妹南米
13	平田善次郎	2	2	農	専	14.7	(8.7) 8.0			3.2		仙太郎区代 善次郎区町				弟一家ペルー，妹一家ブラジル
14	平田　定	11	11	農	専	7.4	(6.8) 6.6	4.0		4.5						兄一家ブラジル
15	青木　芳光	10	10	食糧事務所	二兼	2.4	(2.5) 2.3									親，兄弟ブラジル
16	平田　豊	10	16	農	専	16.3	(16.7) 5.9			3.4		豊 区長，区代				母の弟ブラジル
17	(平田ヤノ)			(北野町養老院)												—
18	戸島　助紀		8	獣 医												戦時中入村
19	(平田　恵)		6	(一家ブラジル)												現在一家南米
20	(平田京子)		2	(婚出)												父の兄弟南米，兄ブラジル
21	平田甚太郎	8	1	息 熊刀 農	専	4.9	(7.7) 7.4	1.0		2.0			(忠雄神父)			メキシコに息子二人，ブラジルに息子一人と弟一家

番号	世帯主氏名	世帯員 一九五〇	世帯数 一九五二	職業（含家族）	専兼別	経営耕地 1950センサス	経営耕地 1950センサス（含宅地）	1960貸付耕地	1960貸付耕地	農改による買受耕地	農改時売渡耕地	部落役職	教会役職（聖職者）	村町役職	非信者（真宗）	移民状況
						反	反	反	反	反	反					
22	平田　直平	9	9	長男 運転手	一兼	7.4	(8.7) 8.4			2.1 畑 0.1			直平宿老			②の弟，ブラジル帰り
23	青木千代刀	4	3	町助役	二兼	2.4	(1.6) 1.2	0.3			1.6		献地1反	千代刀 村議，町助役		⑮の兄 兄が現在ブラジル
24	平田　政吾	6	5	農	専	16.5	(13.5) 13.2			8.2	0.4					娘一家ブラジル
25	平田　一	8	10	日雇	一兼	7.5	(8.5) 7.9			畑 0.2	2.3	惣吉区長	惣吉宿老	惣吉村議		父アメリカ帰り
26	平田　ミツ		5	農		2.1	5.9									娘と息子ブラジル
27	青木シマノ	5	6	長男 運転手	一兼	7.7	(7.9) 7.4			2.9 畑 0.3						娘ブラジル
28	平田　三平	10	10	運送（日雇，事務）	一兼	11.4	(13.2) 12.6			畑 0.3			三平宿老			息子メキシコ
29	平田　作蔵	8	9	三男 運転手	一兼	10.3	(9.1) 8.6			0.5 畑 0.3		作蔵 区長，区代				兄二人メキシコ
30	平田精市郎	8	9	息 春美 農	専	6.8	(9.1) 8.6			畑 0.3	4.0	精市郎 区長，区代				姉ブラジル，妹メキシコ 息子ブラジル，娘メキシコ
31	平田　瞳	6	6	不定	一兼	3.9	(3.8) 3.6			3.8 畑 0.1						姉ブラジル
32	平田　六助	5	5	労務者	一兼		(4.8) 4.3			2.6 畑 0.5						兄メキシコ
33	青木アツコ	4	3		専		(7.9) 7.4			3.1	義雄 9.3		(義雄神父)			主人の父一家ブラジル 姉ブラジル
34	青木　三丸	4	5	弟 西鉄	二兼		(4.4) 4.1				武雄 1.2					父の弟ブラジル
35	青木　喜八		2	妻 タケ			3.6					喜八区長				朝鮮帰り
36	平田伴次郎	8	13	漁，日雇，職人	一兼		(10.4) 10.1			8.2 畑 0.8		伴次郎 区長，区代	伴次郎宿老・委員 (惣五郎神父)			嫁の兄弟の子ブラジル
37	平田　吉次	6	5	農	専		(12.7) 12.4									㉗の息子忠の兄
38	平田　清市	6	6	食糧事務所	二兼		(5.6) 4.9			畑 0.1		清市 区長，区代				姉二人ブラジル
39	平田　七蔵	5	5	農	専	6.0	(8.7) 8.2			0.8	卯吉 7.7					㊹の弟
40	平田　益蔵	7	8	日雇 妻 労務者 長男	一兼		(6.0) 5.7			0.6 畑 0.8	徳三郎 胸刃 6.8	益蔵 区長，区代		益蔵 村議，町議		アメリカ帰り，子供2人 アメリカ，嫁の兄弟2人
41	青木　十助	8	9	職人 二男 事務 五女	一兼		(7.5) 6.8			2.5						（不明）
42	平田　フク	8	9	三男 労務者	一兼		(14.1) 13.4			2.3						⑬の姉ブラジルに子一人
43	(青木イチ)			(死亡)		2.3						喜助 区長，区代	(保神父)	喜助村議		夫ブラジル帰り，息子ブラジル
44	青木サダヨ	3	3													前夫の弟ブラジル

番号	世帯主氏名	世帯員 一九六〇	世帯数 一九六三	職業（含家族）	専兼別	経営耕地 1950センサス	経営耕地 1950センサス（含宅地）	1960借入耕地	1960貸付耕地	農改時買受耕地	農改時売渡耕地	部落役職	教会役職（聖職者）	村町役職	非信者（真宗）	移民状況
						反	反	反	反	反	反					
45	青木クニヲ	6	5		専		(4.7) 3.7		5.6	畑 0.1						夫の兄ブラジル
46	野瀬　又作		9	息　芳勝　農		10.1	9.2	1.8		1.9 畑 0.3						娘メキシコ，姉３人メキシコ
47	今村芳太郎	3	3	三男　工員	二兼	5.4	(3.7) 3.3	0.4		2.8 畑 0.4			—		○	—　（不明）
48	平田　藤平	9	12	農	専	10.8	(10.3) 10.2	5.7		4.6						娘ブラジル，姉メキシコ
49	平田　徳美	8	6	農	専	13.2	(12.4) 12.2		7.9							弟ブラジル，弟メキシコ
50	平田カツミ	3	3	七女 農協事務	一兼	7.6	(7.5) 7.4	3.9			吉蔵 0.7					—
51	青木ハツエ		4													—
52	(青木スミエ)			(下高橋 転出)		2.1										—
53	平田　駒雄	9	11	農	専	12.6	(9.6) 9.1			2.7 畑 0.2						姉ブラジル，妹メキシコ
54	平田　善吉	8	11	農	専	12.2	(10.2) 10.1	0.3					善吉宿老			㊴㊿同胞
55	青木　信		6	勤		4.9				5.2		信　区長	献地 1.4反	栄之，村長，村議，信村長		息子ブラジル
56	平田　強	6	6	農	専	4.0	(3.9) 3.8			2.3						嫁の母メキシコ帰り，母の兄弟１人メキシコ
57	平田サキヨ	2	2	農	専	3.4	(3.7) 3.2	0.3		1.8 畑 0.9						妹１人ブラジル
58	平田トキヘ	9	6	弟義刀 専売公社	二兼	6.1	(6.4) 5.7	4.6					義刀委員 献地 2.1反	義刀町議		兄２人がブラジル
59	平田トモヨ	6	7	農	専	8.3	(7.7) 7.6	3.1		4.3						㊼と姉妹，主人の妹ブラジル
60	青木　スエ	1	3	農	専	2.3	(2.8) 2.0		5.0		18.7 又一郎 4.6	恵吉区代	献地１反	惠吾村義，森太郎村長，村議，助，取		主人の弟ブラジル
61	平田　実	7	7	町役場	二兼	3.8	(4.9) 4.6									兄がブラジル
62	糸永　一		5	教会神父							1.6					—
63	平田　東	9	9	食糧雑貨商	二兼	2.1	(2.3) 2.0		5.7		畑 2.19					ブラジル帰り，母(⑥と同胞)の第２人ブラジル
64	乃次　ヤス		1													ペルーに父の弟
65	平田　弘瀬	6	6	農	専	8.2	(8.9) 8.1	1.8		5.7						兄が３人ブラジル
66	平田　清正	6	7	清心慈愛園長	二兼	6.2	(4.9) 4.7		4.8	0.8	5.1	富太郎区代	富太郎宿老 清正　宿，委			兄メキシコ，姉ブラジル 母の同胞皆ブラジル
67	平田　タキ	1	10	農	専	5.9	(7.0) 6.8			1.4 畑 0.3			タキ修道会長			㊱の母と姉妹（不明）

番号	世帯主氏名	世員 一九六〇	帯数 一九六二	職業（含家族）	専兼別	経営耕地 1950センサス	経営耕地 1950センサス	1960借入耕地	1960貸付耕地	農改時	農改時	売渡耕地	部落役職	教会役職（聖職者）	村町役職	非信者（真宗）	移民状況
					反	反	（含宅地）反		反	反		反					
68	（平田ツネヨ）	4	3	（横浜転出）		2.4	2.3		4.5	畑 0.1	0.1	正勝 3.3					息子３人ブラジル，息子１人メキシコ
69	平田　倉吉		7	息　忠　農		9.3	9.0							倉吉宿郎			兄弟メキシコ，姉，父母の同胞ブラジル
70	平田　正己	7	7	農	専	10.1	(10.9) 9.9	3.5					善四郎区町 善吾区代	（善次神父，ヨシノ修道女） 畝地 0.8反	善四郎助役		姉１人ブラジル，親の兄弟ブラジル　（旧庄屋）
71	青木　速水	3	3	中学校長	二兼		(2.2) 1.7		1.4				速水 区長，区代				兄がブラジル
72	平田　正刀	3	3	母　日雇 妻　労務者	一兼	2.3	(2.5) 2.3				1.7						—
73	平田カツヨ	1	1	農	専	0.8	(0.9) 0.8			畑 0.9				—			兄メキシコ
74	平田　常蔵	8	4	妻　漁 二男　事務	二兼	8.6	(9.0) 8.3										ブラジル帰り，娘ペルー
75	平田政次郎	2	5	農	専	8.6	(9.4) 9.0	3.5			4.3			—			—
76	平田　辰蔵		6													○	—
77	青木　イト	2	4	長男　事務	二兼	1.2	(1.4) 1.2				1.2			—			同胞１人ハワイ
78	平田　寅蔵	6	6	農	専	11.2	(13.0) 12.3			畑 0.8	2.1		寅蔵 区長，区代	—		○	⑦⑥の兄　なし
79	竹崎　政尾	2	2	農	専	6.0	(3.1) 2.5				畑 2.1 池 0.1 0.6			—			ペルー帰り，嫁の兄弟ブラジル
80	平田岩次郎	12	11	二男　車掌	一兼	17.3	(16.7) 15.9				2.2		岩次郎 区長，区代	—	岩次郎 村議，町議	○	ブラジル帰り
81	平田　万吾	10	13	農	専	19.7	(13.9) 13.7	0.5		畑 0.8			万吾 区長，区代	—		○	—
82	平田　小市	13	10	農	専	16.0	(17.6) 17.1	6.3			2.7			—		○	弟１人，息子２人ブラジル
83	（平田　善市）		1	（死亡）										（敬神父）			⑦⑩の父の弟 兄弟と姪がブラジル
84	（中島　正行）		5	（下高橋）													—
85	竹崎　貞夫	4	4	国鉄 妻　看護婦	二兼		(1.5) 1.4										⑦⑨の甥 嫁の妹ブラジル
86	戸島ヒサヨ		3	⑬の妻								平田文雄 ヒデノ 9.9					—
87	野瀬秀次郎		1														ペルー帰り 娘１人ペルー
88	青木ミキヨ		1	③の母										—		○	—
89	平田ミツカ		2	㊲勤と同世帯													父の兄弟ブラジル

種が見られるのは周知の通りである。現在のデイスカバー・ジャパン、ふるさと回帰、家回帰は、第二の種のものであろうか。それとも、第二次大戦と敗戦後の荒廃が回復した後の当然の静謐への沈澱であろうか。周防沖家室村（山口県大島郡東和町旧沖家室村[4]）の盆時におけるふるさと回帰、家回帰は稀有に属すると思われる（一九七三調査）。本村は、本島大島の附属島で一村一島をなし、面積〇・九七四方粁、周囲約四粁。かって「家室千軒」といわれた繁栄の歴史を持つが、漁業と移民に驚異的な実績をあげている。昭和三〇年に「人口密度世界一（宮本常一、泉靖一）」と嘆称された（明治一七～一八年は、最近の最盛時で八〇〇余世帯、三、〇〇〇人余。昭和二一年五七一世帯、二、二三〇人）が、調査時六〇六人で過疎化傾向の中にあった。もちろん、移民は国外（ハワイ、台湾、朝鮮中心）であるが、朝鮮、台湾、比島までの遠洋漁業の盛況も記録されており、その活動は積極的である。当然、島外―国内転住のケースも非常に多い。ところで銘記すべきことは、出島者と島民との結合である。元来、以前から国外出島者と（も）島の姪子神社との結合は強かったし、敗戦直後の物資窮乏時に、毎日国外よりの輸送物資を郵便局からセイタ（背中運搬用具、木製）で運んだ話、また国外からのプレゼントで家を建てた話などもある。つまり、以前から愛郷心の強い島といえる。ところで、近年は盆時の帰島が特に盛んとなり「島の人口三、〇〇〇人に、島が沈む！」などと一挙に五倍になる特異な状況が新聞報道された。一年の特定時期に実現するふるさと回帰、家回帰といえる。已に過疎化の大勢は不変と思われるが、平素は老人家族を高率に含む島の家族型態のこうした生活の年間サイクルは、先祖供養を媒介としている丈けに、家族の在り方に関する日本的特性として興味ある現象であろう。

高度経済成長、高度雇用政策、生活水準向上、思考様式の現代化の大波――つまり、戦後の三〇年代以降における日本資本主義の発展は、各地で途方もない形で地域と家族を変貌させている。著者が確認したのは、太平洋沿岸ベルト工業地帯の中、瀬戸内工業地帯周辺のものが多いが、次の三例証を示し得る。

最初の例は、過疎化傾向が地域を決定的に変容させ、家族の成立をも不可能にさせている例である。瀬戸内工業地帯の中、周南特工整備地区の稼働圏に属する光市牛島は、光市室積の南方約八・五粁に浮かぶ[5]。周囲約一二粁、面積一〇・三方粁。人口は、一六世紀に五三八軒の記録があるが、その後明治以来一貫して一二九世帯、八一〇人程度。敗戦後一、〇〇〇人を突破。調査時点（一九七）で一四三世帯三九五人。そこで、先ず過疎の実態を紹介しょう。図1、図2および図3はこの内容を示すが、小・中学九年間で四四名の離島では、一学年平均五名である。これにはさらに性別があるので、野球はもちろんバスケットの同一学年内でのチーム編成すら不可能である。したがって気の利いた行事はすべて学年の枠を外し、小～中を通しての統一行事となる。しかし、小学一年生と中学三年生ではすべての発達段階が余りにも違いすぎて、同質（的）集団形成に難点が多い。人間が、社会的存在である、といわれる所以は集団に属しているからであるが、ここでは、人間形成に必要な社会集団がないのである。そして、

図１　牛島小学校児童生徒数の推移　グラフ ⑥

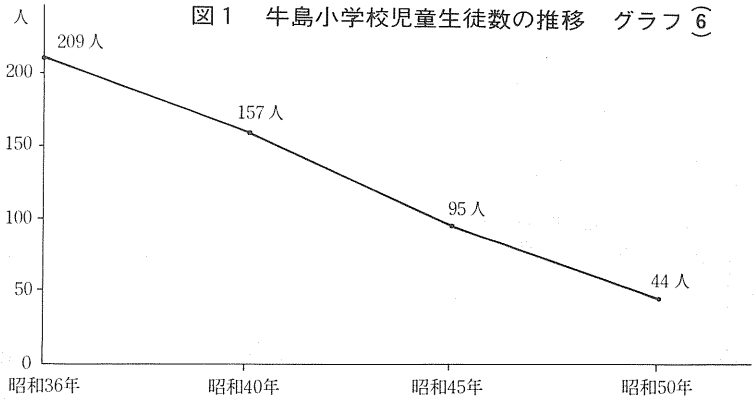


図２　過疎の算数（Ⅰ） ⑦

◎　組合員１人当りの漁協関係人件費の年間負担額　試算

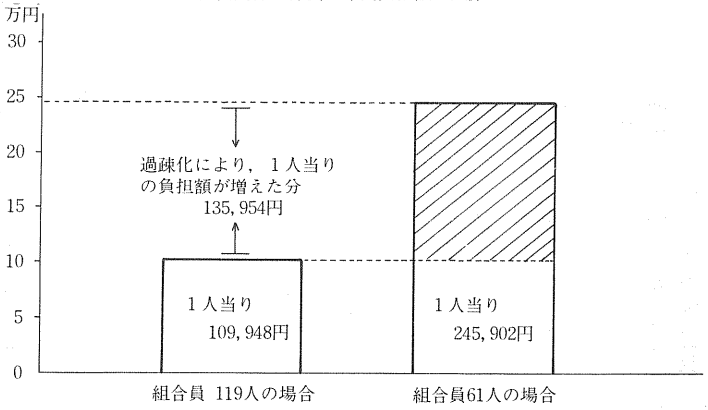
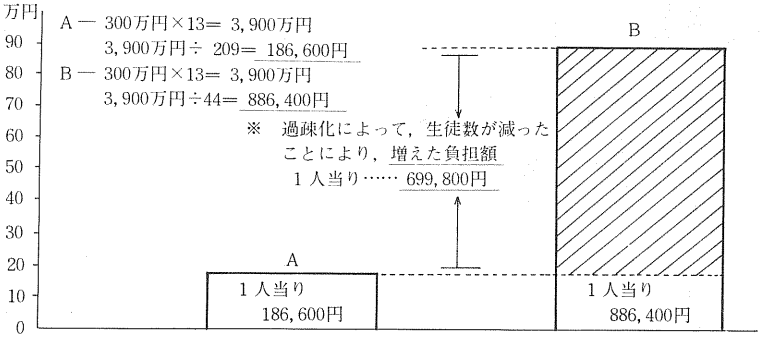


図３　過疎の算数（Ⅱ） ⑧

◎　義務教育費　試算



このような状況は島のあらゆる生活場面にあらわれてくる。次に、この過疎の状況を生産（経済）構造で押さえたのが図3および関連的に図2である。一見判明するように、かつての計測尺度で基準値以下となった人口は、必要経費の頭割負担高を割高にしている――それも極めてアンバランスな程度まで。そして、当然その事が島の生活を苦しく、不便に、魅力少なくして行き、過疎化傾向はさらに、強まる、という悪じゅんかんにある。もちろん、千年近く前からの漁業があり、国家や自治体の漁港への投資も巨大なもので、現在も近海、沿岸にかなり漁場を持つ。これに対応して、自生的な主体的住民の動きも目立って来た。しかし、過疎の人口減は、島の家族にとって今一つの致命的な問題を持っている。それはいわゆる「嫁キキン」の問題である。すなわち、現代の島民で独身男子の中、島内で嫁を貰う可能性の無い男が一三人算定される。つまり、三〇歳になるまで相手の女性が島内に全く居ない。しかも高校生以下の若い人は、全部本土に顔を向けているので初老まで見通し不明といわれる。可能性ある漁場を持ち乍ら、それ以上に工場雇用が人を奪った結果こうなったのである。老人家族の率はふえたが、残っている青年こそ、漁業を守り、地場の歴史、文化、産業を守る――最後の人達かもしれないが――その男に嫁がとれないのである。以前は出島者も島に帰れば、現に相棒が在島しようがしまいが、島民同志で、自然の中に婚姻をすすめる事は簡単だった。この長い歴史は変った。いまは島民が島民に嫁をやらず島外に出す風潮になっている。こうなれば、――家族は結婚により成立するが故に――この島では、家族の成立が困難な層が存在する事になる。この事態に対応して現在考えられている一つの有力な対策は、本土に家を持ち、通い漁業又は高頻度帰島をする生活様式であるが、「親と家と墓――時には職場をも」島に残しての複雑な生活は簡単ではない。極端に表現すれば、いま、島―地域―は、その家族と産業に対する将来の人口を持たない、といえる。

第二の例は、消費文化への流行、迎合が、生産従事様式への主体性を崩かいさせ、農村家族の過度の個人化（未熟な都市化による家族の解体的傾向）を招く懸念のあるばあいである。山口県阿武郡田万川町上小川、上の原台地[9]（1974調査）は、山陰側で山地が八〇％近い地方にある。台地面積一四四町、内訳は四〇町が果樹園、竹林、山林で一〇四町が畑、麓に二町の水田があった。台地上に、農家三四世帯、他に台地の麓に約七〇世帯の農家（こちらの農家は、台地以外の耕地所有者も多い）が台地上の耕地経営に関係していた。これらの農家が土地改良組合をつくり、土地改良、土地整理―交換分合をなし、かつ大規模なかんがい事業（昭和三二～三五年度）を推進し完成させ台地上に五十町の美田をつくり上げた。それは、かなりの自己資金も準備したもので、血のにじむ苦闘の連続の結果、一応の大成功（経営内容、生活水準のコペルニクス的転換）を収めた見事な事例であった。しかし、その後の農村の状況の変化は、「その次の段階」で楽観を許さなかった。減反政策、大型機械の導入にやや問題を残した基盤整備と区画整理の状況、登記作業の複雑因難、農道が狭隘であったこと、農民が「金が貯まれば百姓をヤメル」のでなく、何故「経営としてもっとホンモノの農業の拡大」

にかけないかの問題――などなどが、折角の期待の新農村を、一般的で平凡な兼業農家へ再びつき落とす危険性を持っている。加えて三〇年代からの消費文化は、生活水準のみを急速に上げなければ止まない生活のペースの中に地域を投げこんだ。家の新・増・改築、自家用車の購入などなどで一〇組以上の頼母子に入っている農民も多い。この間まで電灯もなく頑張ったのに、何故あと一〇年～二〇年を一頑張りして、次の段階でもすぐれた農民として勝ち残らなかったのか。ひたすら現金収入を求めて兼業化する態様の兆しは、家族をも未熟な都市化の持つ個人主義化現象によって、その共同性――家族の一宇宙性――を後退させているといえる。

第三の例は、現代文化の持つ逆機能現象の問題である。いま、正面切っての理論では、「現代は核家族の時代であって、これは歴史の発展方向である。そして、家族内で介護を要するような心身障害者に対しては、個人化の原理から――また専門的対策の必要から、施設収容（又は利用）が考えられる時代」といえる。しかし、二千万人を越す女子労働者――この中半数は已婚者であるが――つまり共働きの増加の今日、孫の保育に活躍する祖父母との同居肯定（つまり非核＝直系〈的〉家族）の論も根強い。核家族単位で分析してみたばあいの親世代の第四期（危機）と子世代の第二期（経済的危機）との相補関係を強調するわけである。世俗的に言って、親の家を利用出来る丈けでも大変なメリットである。この伝でいえば、大体まだ社宅や官公舎などに老人部屋を付ける話しを聞かない。が、これは核家族時代に完全対応する意図ならともかく、そうでなければ、日本の住宅事情はまだ家族問題に十分に対応していない、というべきであろう。この問題には、まだ老人の意識の問題もある。つまり、日本ではまだまだ老いて後、個人の尊厳を持すよりも、子や孫との日常的かつ最終的接触を喜こぶ方が多い。だから、以上のいろいろの点を綜合して、日本の核家族化はもう余り進展せず、直系家族、（的）状態の残存率が、市井の予想より高い、と推定される。

こうした動きを更に確かめるのが福祉政策の動向である。家族の介護能力に余る状態が存在するばあいと、高度な専門的対策が心要なばあいは、施設は社会に必須のものである。そして、戦後の民主々義の大黒柱のように謳われる福祉政策の中心は、施設の設置であったといえる。これが家族の不健全要素の引受けによる家族運営の健全化に大変な効果があった。ところが、人口構造の推計は生産労働年令人口（扶養層）と被扶養層（老人、子供）の関連で楽観出来ない型相を予告した。つまり、子供の減少で将来の労働力は減少し、老人の増加で被扶養層は増大するのである。福祉政策は、この将来に対して抜本的にその軌道を修正せざるを得ない。福祉亡国の警告的ジョークが喧伝された所以である。このことと表裏するのが、低成長不景気時代への突入である。神武景気、岩戸景気といわれた高度経済成長時代には、「戦争をやらない日本としては、福祉、医療、教育以外やる事がない」ほど原資が余った、ともいえる。その時代が終ったのである。

かくして、体制の志向した事自体が、かなりの軌道修正を迫られており、社会体制の反映としての家族もまた当然その問題を反映させられる。

「存在が意識を規定する」とは、人間、集団、社会を見るさ

いの一つの有力な見方である。一般的には、生産（経済）構造が優先するという事を示すが、ここでは類縁的な要因として、物の条件として社会的・地理的位置と面積・空間構造がこのばあいでの文化内容たる家族の型相に影響を及ぼしている例を紹介したい。

このばあいの最初の例は、社会的・地理的位置に関する六連島（山口県下関市彦島区[10]）であった。この島は面積〇・六九方粁、人口は調査時点（一九七五）で、六一世帯二五七人。農家三七、漁家四五、何れも、小規模ではあるが、近郊性から優秀な経営も多い。ところで、ここの人口は藩政末期から一定である。早くから飽和状態に達したのであろう。島の位置は下関市彦島の沖合六粁、北九州市小倉区へも一二粁という地点にある。そして、この関門地帯は本土と九州、日本とアジアの接点をなす。歴史的な事件もこの地帯周辺で数多く出現した。経済、交通、軍事の要衝である。調査時点でも、門司検疫所（六連支所あり）は、検疫船数日本一を示していた。そしてまた六連島民は、殆んど全世帯が船を持つ（別に一日四往復で下関と連絡する定期船あり）。したがって、社会的・地理的位置がもたらす社会的機会の豊かさが当地域社会の特色といえる。島や港は元来が人口は流動的である。殆んど全国から人と物資が集散し、寄留者も多い。加えて社会的機会の豊かさは、家族に関してもいろんな特異型相を生んだ。先ず、ここでは嫁キキンがない。しかも、市外、県外から非常に多く嫁入している。寄留も多いが、島民の島内外での動きも激しいからである。人口の安定性は已述したが、分家、養子、嫁入ともに島外への方が多く人口が飽和状態を越す事が防がれている。又、養子に非血縁のものもあり、血縁以上に強い「海の文化」「港の文化」「板子一枚海の底」文化のヒューマニズムを示す。又、二重居住―つまり若い時島外で一旗上げて帰島し、中年以後島内役職などをつとめるパターン――つまり、家族の根拠地が島内外二重に示される例も多い。家、地域、血縁に拘束される事の少ないコスモポリタン的家族、家庭、個人といったものが偲ばれる。六連のケースは、流動型が定着型を崩かいさせて入れ替ったばあいとみることができよう。

社会的・地理的位置の第二の例は、地域的隔離が古型を定着させていると思われるものである。中浦（山口県防府市中関地区[11]）は、一自治会をなし、二四二世帯八一五人である。農家九八、漁家四〇が、地の者中心に存在し、他は分家とベッドタウン化した意味を含めてサラリーマン世帯である。中浦は、防府市央や中関とはしや断される山を拒てている。昭和四三～四四年度、七米巾の舗装道路が山あいを貫いたが、それまでは四米巾の道、更にその前は牛道、野道のレベルでしか市央に通じなかった。ところで、防府市は、奈良、平安時代の国衛（周防の国府）があったところで、管公滞留の史実も著名である。したがって、この中浦にも千年祭を済ませた祠社が幾つもある。人間居住と人文活動が古くから今日に伝わっているところが、この地域社会の地域と家族の特色を形成している。ここの調査で銘記すべきことは次のような事であった。先ず、自治会の内部は一九班に分れる。これが、明治以来の地方自治制度の末端として官製のものであり、大政翼賛時代の隣組を経て戦後再生し、今日に至って

いる。しかし、こちらは、班長は当番制で六ケ月〜一ケ年の任期である。ところで、これより別に部落運営委員という組織があり、七名の委員がいる。ところが、こちらは安定型の長期留任パターン。そして、こうしたラインの終局にあるトップリーダーとして自治会長があるが、これは調査時点までの戦後三〇年間を僅か二人で勤めている。そして、大切なのはこのほかに氏衛組なる組織があることである。この組織は、あるいは奈良、平安時代以来で自生的とも見るべき性質と考えられる。氏衛組は九組を算し、ほとんど一氏衛組毎に祠社を持ち、伝承して行く記録箱を伝え続けており、伝来の祭祀行事も現存する。この組毎の祭祀行事は、近年こそ女が代替出席するようになったが、以前は家の代表として男の行事であった。そして、最も興味を惹かれたのは、氏衛組所属の経過である。つまり、部落内で移動して新築、あるいは部落内の別の地に分家したばあい、氏衛組を変更することは殆んどないのである。したがって、属地制の班所属と氏衛組所属とは全く別の経路で別の組織となっている。もちろん、他所からの流入者は氏衛組に入らないことも多い。つまり、ここ中浦では、その家族は時代と共に変化し乍らも尚「家」的なものを残存させているように考えられる。

物の条件としての面積や空間構造が家族の型相に影響を及ぼしている例としては次の二つのばあいがあろう。このばあいでは、家族は家族だけが持つ世界を持ち得ない、といえる。家族成員だけによる一つ棟での同居、社会的独立、妊娠—出産—育児—進学—就職に関する成員の協力と労苦、夕げの団らん……などといったものが家族の日常生活であるとするばあい、ここにはそれはない。

已述の沖家室のばあい、土地と人口とのバランスが極端にこわれているため、中央幹線道路も四尺程度、家と家との間隔も一尺程度である。昔は平均して四畳半の部屋が一室か二室であった。外海、近海、沿岸漁の盛んな戦前までの時期には、舟子層では、舟主層の広い家に寄留するが、八畳間に三〜四世帯が生活するという状態である。ここでは、森閑とした一室に水いらずの家族生活といった態のものは存在しない。尤も、已述したように殆んど年中出漁しており、外海出漁期も多く、近海漁までは夫婦で出漁するので、下宿屋みたいな実態はある。しかし、これがかっての沖家室漁業を支えた家族型相である。

次に、已述の六連のばあい、人と物資の集散の激しい位置が特色であったが、当然ここでは、非本籍人つまり寄留者が多い。そして、海、島、港——の文化では、これを家族同様に包摂する事が多い。もちろん、空間構造は沖家室とほとんど同様である。さらに、ここでは、明治期のことではあるものの、「親不明」「推測年令」「棄児」といったものも見られる。そして、余りわけ拒てなく、結婚、分家、養子の対象者となって行く面がある。ここでは、「血統」「家」といった問題は戦前已に早くから大した問題ではなかったと思われる。こうした層にあり得たのは、個人、家庭、世帯からせいぜい家族までであったろう。

三　体制と家族

体制は家族型相を規定する。しかし、その規定には、経過過程、浸透過程、あるいは対立――止揚過程がそのまま内包される。微視的分析では、このことは常時存在する問題ともいえよう。そして、約三十年間（出自家族約三十年、生殖家族約三十年）の家族生活の内容は、むしろこうした経過、浸透、対立――止揚そのものだといえなくもない。

しかも、体制の種類もまた一つだけではない。が「地球は狭くなった」といわれるし、現代は「情報管理」の時代だともいわれる。我々は、「人間にとって家族とは何か」「人間にとって未来の家族はどうなるのか」の問題で鋭意これを論究せねばならない。

（注）

（1）林雅孝「中華人民共和国の家族生活―その一孝察―」山口大学文学会誌、第三〇巻、一～一五頁、昭和五四年一一月。

（2）本調査の詳細は次のものを参照にされたい。林雅孝、「宗教と村落(Ⅱ)―筑後今村におけるカトリック信仰と現実生活―」山口女子短期大学研究報告、第二七号、PP. 9～24、昭和四七年三月。

（3）本調査の詳細は次のものを参照されたい。林雅孝「島嶼村落の社会構造(一)」山口女子短期大学家庭生活実態調査報告、昭和四六年三月。林雅孝「島嶼村落の社会構造(二)―周防大島旧和田村―」同前、昭和四七年三月。

（4）林雅孝「島嶼村落の社会構造(三)―周防大島旧沖家室村―」同前、昭和四八年三月。詳細については上記を参照せられたい。

（5）林雅孝「牛島の社会構造と住民の生活構造―生活・労働・児童―」山口女子大学同前。昭和五三年三月。詳細については上記を参照せられたい。

（6）（7）（8）地元振興を考える会「牛島郷土意識実態調査書（昭和五二年一～二月）」より引用。

（9）林雅孝「農業で活路を開く――農民の生活を主体とした山口県田万川町の畑地かんがい」月刊『用水と営農』（日本イリゲーションクラブ発行）昭和五〇年四～五月号連載。詳細については上記を参照せられたい。

（10）林雅孝「六連島の社会構造――過疎状況にない離島の問題の構造―特に家族の『構造』分析――」同前。昭和五一年三月。詳細については上記を参照せられたい。

（11）林雅孝「漁村の社会構造と生活構造――村落紐帯の社会的基盤（防府市中浦のばあい）――」同前。昭和五二年三月。詳細については上記を参照せられたい。

（山口女子大学教授）